

しのびごと 藤原鎮男先生

1920 (大正 10) 年 7 月 17 日生。東京府立第二中学校、第一高等学校を経て、1944 (昭和 19) 年 9 月東京帝国大学理学部化学科卒業。東京帝国大学理学部大学院特別研究生として化学科木村健二郎研究室にて研鑽、1949 年電気通信大学助教授、1956 年教授、1960 年東京大学理学部教授化学科分析化学講座担当、1963-1967 年無機合成化学講座兼担、1978-1981 年東京大学図書館長、1981 年 3 月東京大学停年、同年 4 月千葉大学理学部化学科教授、1986 年 3 月千葉大学定年退官、同年 4 月神奈川大学教授知識情報研究所長・理学部長、1993 (平成 5) 年完成年度終了退職。1992-1996 年国文学研究資料館客員教授。日本化学会進歩賞 (1953)、朝日奨励賞 (1960)、日本分析化学会学会賞 (1969)、勲三等旭日中綬賞 (1994) 受賞。日本分析化学会・日本核磁気共鳴学会・情報知識学会名誉会員。



2018 (平成 30) 年 10 月 3 日に本会会長を務められた恩師藤原鎮男先生が 98 歳 2 ヶ月余の天寿を全うされた。先生の御生年の翌年に発足した東京帝国大学理学部化学科分析化学講座は、当初、無機化学講座 (当時の名称は化学第三講座) 担当柴田雄次教授が兼担、1927 (昭和 2) 年留学から帰国した木村健二郎助教授が講座担当を引き継ぎ、1933 年に教授、1942 年に柴田教授が東大停年となって名古屋帝大に転じ、木村教授は無機化学講座担当、分析化学講座は南 英一教授の担当となった。藤原鎮男先生は南 英一先生の後を継がれた、実質的には三代目であり、筆者は南先生の最後の修士課程院生であり、藤原先生の最初の博士課程院生でもあった。

第二次世界大戦後、分析化学の基礎・応用での重要な課題の中には、溶液化学と機器分析があった。ポーラログラフィーや高周波滴定などの電気化学とブンゼン以来の伝統である分光化学が機器分析の主流だったと言えよう。が、核スピン・電子スピンの磁気共鳴現象と電波分光化学とを組み合わせた磁気共鳴分光法は全く新しい物理測定法であった。それを旋盤以外は手動工具の手作り装置で立ち上げたのが電気通信大学藤原鎮男助教授の研究室だった。そこには同大学内外から異色多様な学徒が集まり、その後の磁気共鳴分光化学を牽引し、発展させた。

藤原先生は先導的発信者であり続けた。東大に転じて間もない 1961 年、まず国内で NMR 討論会を立ち上げられた。それは現在では日本核磁気共鳴学会に引き継がれ、先生は同学会の名誉会員でもあった。次いで 1965 年には、日本分析化学会が初めて主催した国際会議として、第 1 回国際核磁気共鳴会議を組織され、海外からも実績のある研究者たちが参加した。当時の日本としては画期的な事績であった。先生の発想は時として凡人の理解をはるかに超えるところがあった。まさに非凡だった。動物個体を丸ごと試料にした磁気共鳴の測定を試みられ、米国での国際研究連絡の際に、今一番欲しいのは人間を入れて測定する磁石だと発言されたのが 1974 年のことだった。MRI はその頃から開発が始まった。

分析とは、対象とする試料に何らかの信号を入力し、試料が入力信号にどのような変動を与えたかの観測結果を解析し、試料の本性を理解する作業であるとする、分析化学は広義の情報科学に包含されることになる。それをさらに敷衍すれば、森羅万象すべてに関する理解に

は精確な情報伝達が必須となる。大型高速電子計算機と連結した国際的電子通信網の実用化が見え出した頃、藤原先生は科学全般における知識情報システム構築の実現に着目された。1970 年代半ばには東京大学大型計算機センターを中核とした学術情報データベースのオンライン検索が実行可能となった。現在では大衆の常識にもなっている電子化された情報検索技術の我が国における濫觴はここに求めることができる。先生は情報知識学会の名誉会員でもあった。本誌 2018 年 5 月号「分析化学のあゆみ 戦中戦後からの分析化学 77 年とわが軌跡」が先生からの最後の公的発信となった。

藤原先生の研究業績は真に多岐に亘っており、日本分析化学会賞以外にも国内での諸賞を受賞されたほか、フランス共和国政府国家功労シュヴァリエ賞、インド共和国カウラ国際メダル委員会賞を受賞され、1988 年には多年にわたる学術研究への貢献によって勲三等旭日中綬賞を受賞された。

東大理化無機分析系には長寿の先生方が多い。満 98 歳のお誕生日に亡くなられた柴田雄次先生を超えた藤原先生が最長寿を記録された。現役の諸兄姉にとっては、大昔とは言わないまでも、歴史上の人物に近いであろう。昔には昔なりに良いところもあった。「薫陶を受ける」という言葉がある。藤原研門下生には、昨年亡くなられた奥様からもあったのだが、公私にわたってその恩恵に浴した者が少なくない。それぞれに一家を成した者も少なくない。昨今世間では誤解が横行しているように見えるが、大学はあくまで教育機関であり、大学教授が第一に評価されるべきは人材の育成である。一将功成っても万骨枯れるようなところは大学ではない。藤原先生はその王道を護る古風な律義さをお持ちだった。門下生にとってはまことに有難いことであった。

藤原鎮男先生が東大理化分析化学講座担当を命じられた 1960 年の 5 月、先生を中心にした学界・業界関係者によって日本分析化学会に高分子分析研究懇談会が発足し、現在も継続している。この歴史的事実を述べて、しのびごとを終える。

〔東京大学名誉教授 岩本振武〕